

令和2年度

ひたちなか市少年の主張大会

発表記録集

勝田第一



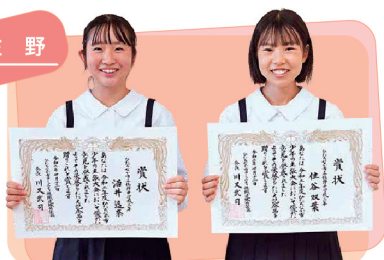
勝田第二



勝田第三



佐野



大島



田彦



那珂湊



平磯



阿字ヶ浦



主催 市コミュニティ組織連絡協議会
主管 一中地区地域のふれあいを広める会・同青少年部会
後援 ひたちなか市・市教育委員会・市校長会

令和二年度ひたちなか市少年の主張大会要項

一. 趣旨

少年が健やかに成長するためには、自らが社会の一員としての自覚と責任感に目覚めることが大切であり、親をはじめ少年を育成する立場にある者は、これら少年の健全な成長を支援していくことが必要です。

このため、中学生による少年の主張大会を開催し、少年が日常生活の中で感じたことや考えていることを広く社会に訴えることにより、将来に向かって自信と誇りを抱き、また、同世代の少年は、より深く他者や社会との関わりについて考え、併せて少年の健全育成に対する一般の理解と関心を高めようとするものです。

三. 主催

ひたちなか市コミュニティ組織連絡協議会

四. 主管

一中地区地域のふれあいを広める会・同青少年部会

五. 後援

ひたちなか市

ひたちなか市教育委員会

ひたちなか市校長会

二. 実施方法

(一) 新型コロナウイルス感染拡大防止のため、例年七月(会場…ひたちなか市文化会館大ホール)に実施している発表会形式のひたちなか市少年の主張大会は中止といたします。

(二) 各中学校代表の主張文は、ひたちなか市ホームページでの掲載及び記録文集で発表します。

六. 募集

市内各中学校 二名以内

目

次

海洋プラスチックごみ問題
生きやすい社会を
いじめが世界からなくなるには
見方を変えてみたら：
差別のない世界を
街のゴミを「ゼロ」に
幸せに生きるということ
誰もが深呼吸できる未来へ
コロナで再発見！給食がくれる幸せ
これからを生きるために

勝田第一中学校	照沼 <small>てるぬま</small>	若奈 <small>わかな</small>	1
勝田第一中学校	杉元 <small>すぎもと</small>	来羽 <small>くれは</small>	3
勝田第二中学校	木村 <small>きむら</small>	斗耶 <small>とうや</small>	5
勝田第二中学校	助川 <small>すけがわ</small>	陽菜 <small>はるな</small>	7
勝田第三中学校	竹中 <small>たけなか</small>	愛莉 <small>あいり</small>	9
勝田第三中学校	西村 <small>にしむら</small>	拓真 <small>たくま</small>	11
佐野中学校	住谷 <small>すみや</small>	双葉 <small>ふたば</small>	13
佐野中学校	酒井 <small>さかい</small>	遙奈 <small>はるな</small>	15
大島中学校	太田 <small>おおた</small>	玲美 <small>れみ</small>	17
大島中学校	堀江 <small>ほりえ</small>	李羽 <small>りは</small>	19

大人へと成長するために

田彦中学校

藤咲 拓睦

21

楽器がくれた笑顔

田彦中学校

佐藤 ゆりこ

23

ベストをつくす楽しさ

那珂湊中学校

久保田 真尋

25

コロナウイルスとの共存

那珂湊中学校

眞家 湮彩

27

命の大きさ

平磯中学校

川崎 寿樹也

29

セルフ・ハンディキャッピングからの脱出

平磯中学校

飛田 汐音

31

コロナに包まれた世の中

阿字ヶ浦中学校

大久保 歩夢

33

大切なこと

阿字ヶ浦中学校

柴 琴理

35

「ひたちなか市少年の主張大会」講評

ひたちなか市教育委員会教育長

野沢 恵子

37

海洋プラスチックごみ問題



勝田第一中学校 三年

てるぬま
照沼
わか
若奈

以前私が服屋へ行ったとき、お店の袋がプラスチック製から、紙の袋に変わっていることに気がつきました。今思えば、最近、お菓子の袋も紙製になっていたり、カフェのストローも、紙製になっていたりするなと感じます。プラスチックが環境に悪影響を与えているという情報は、少し耳にしたことがあります。しかし、具体的な理由については知りませんでした。むしろ、リサイクルできるからもっと利用するべきだと私は考えていました。

理由がとても気になったので、プラスチックが環境にもたらす悪影響について調べてみました。なんと、年間少なくとも八〇〇万トンものプラスチックごみが海に流れ込むそうです。さらに、二〇五〇年にはそれが海にいる魚と同じ量にまで増えると予測されているのです。二〇五〇年の時、私はまだ四十五歳ということになります。たった三十年でそんな状態になるか

もしれないと思うと、とても不安になりました。プラスチックが海に流れ込むことは生き物にも影響があります。例えば、ウミガメがポリ袋を餌のクラゲと間違えて飲み込んでしまい死んでしまったり、胃の中に入ったプラスチック破片によって満腹だと勘違いして、餓死してしまったりすることがあるそうです。けれども私はあまり海には行かないし、海に向かってごみを投げ捨てたりしたことは一度もありません。みなさんもそうだと思います。しかし、海や砂浜に捨てたプラスチックごみだけが海に流れ込むわけではないそうです。私たちは普通、レジ袋やペットボトル、パッケージなど、たくさんプラスチック製品を使っています。それが屋外にポイ捨てされたり、放置されたりすると、雨や風によって河川に入り、海に流れてしまいます。つまり、海に捨てたわけではなくても、海に流れ込んでしまうということです。私自身も、一度も路上にポイ捨てをしたことがないかと聞かれたら、正直自信がなくなります。ポイ捨てされたごみも、たくさん見かけかけますし、その中にはプラスチック製のものが多く含まれていたように思います。みなさんは、ポイ捨てをしていないと言い切れますか。

今回調べてみて、初めて知ったことがたくさんあり、その多

くは衝撃的なものでした。私は、海や海の生き物を守るために一人ひとりが真剣に、この問題に向き合うべきだと思います。考えてみれば、取り組めることはたくさんあります。例えば、レジ袋を使用せずにエコバックを使うなどです。今年の七月一日からは、全国でプラスチック製の買い物袋が有料化されました。私も、できる限りレジ袋を買わずに、自分のバックを使いたいと思います。そして、環境のために、一番大切にしてほしいことは、ポイ捨てをしないことです。先程も述べたように、ポイ捨ては、海にごみ流れ込む原因の一つでもあります。「このくらいいいや。」と思わずに、ごみ箱に捨てましょう。

海洋プラスチックごみ問題は、私たち若い世代の未来にも大きく関わっていると思います。便利なものに頼りすぎず、一人ひとりが地球のために取り組む。そのような社会が早く実現することを、私は願っています。

生きやすい社会を



勝田第一中学校 三年

すぎもと
杉元 来羽

(あ、まずい) こう思ったときにはもう手遅れでした。一人の男性が私のそばで柱にぶつかりました。全く知らない人。ですがそれは今でも私の心に残り、私を後悔させ続けています。その男性はサングラスをかけ、白杖を手に歩いていました。すぐに視覚障害者なのではないかと気がつきました。私は声をかけようかと迷いました。けれど、周りにたくさん人がいたし、そのときは待ち合わせをしている最中でした。言い訳はいくらでも思いつきます。しかし本当は、もし彼は実は視覚障害者ではなかったら、手伝いを断られてしまったら、と自分が傷付くことがいやだっただけです。声をかける訳でもなく、ただ見ていました。すると、その方はぶつかりました。どうしよう、と私が考えている間に近くにあったカフェの定員さんがすぐに飛び出し、声をかけていました。白杖のあの人は私が思っていた通り視覚障害を持つ方でした。私はとてもショックを受けました。

その時からこの様な事を減らせる様に、自分に何ができるか調べました。学生の自分ができる事の一つは声かけです。もちろん容姿で目の不自由な方だと気付ける場合だけではないと思います。思いきって声をかける事が大切だと実感しました。もし、それで「〇〇に行きたい。」などと言われれば無理に手を引いたり背中を押ししたりする事なく、肩や腕に掴まってもらい、一緒にその場所まで行く事なども。自分にとっての当たり前ではなく相手にとっての当たり前前に合わせて最後までサポートすることが大切だと分かりました。私もあの時、せめて近くの人に伝えるなど何かできたらよかったなと思います。

後は道を空けておく事などもできると思います。例えば点字ブロックの上にあるゴミや石、自転車などを片付ける事。また、いざ目の不自由な方がいたら自分が道のはじによける事。

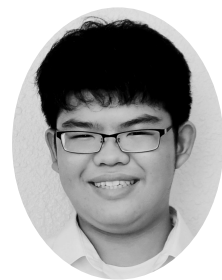
目の不自由な方は歩く事をサポートしてくれる盲導犬を連れてある時があります。この盲導犬を連れる事に費用はかかりません。しかし、普通の犬を盲導犬として育てるのに約三百万円の費用がかかります。ここで自分たちにできる事は募金です。募金をする事で、この費用を補う事ができます。また、盲導犬候補の子犬を生後二ヶ月から一ヶ月程度の間一般家庭で預か

り、社会化トレーニングをするパピーウォーカーというボランティアがあります。私の家でも今まで三頭の子犬を預かった事があります。しかし、パピーウォーカー後の本訓練の末、テストに合格し盲導犬になれるのは全体の約二〜四割しかいません。今日本で実際に活動している盲導犬数が約千頭なのに比べ、盲導犬を必要としている方は約三千人と全然足りていません。

このボランティアは簡単にできるものではないと思うし、時間もかかりますが、これもまた目の不自由な方のためにできる事の一つなので全国でこの活動に取り組む人が増えたらいいなと思っています。

ここまで色々書いてきましたが、結局私が何を伝えたいのかというと、一人でも、学生でも、できる事はあるということ。近い将来公平な社会が築いていけたらいいと願っています。とはいえ、私がこうして作文にまとめても実際にこの文に目を通すのは数人だろうし、かといって私に大きな事ができる訳ではありません。まずはその数人の心に、私の文を少しでも残す事ができれば嬉しいです。

いじめが世界からなくなるには



勝田第二中学校 三年

木村 斗耶

社会問題とはなにか、と問われたとき、皆さんが一番最初に思い浮かべるのはなんですか。「地球温暖化」ですか。それとも「少子高齢化」ですか。

もちろん、この二つは深刻な社会問題です。これからの日本が、さらに発展していくのかどうかの一大テーマと言っても過言ではないでしょう。

とても多くの社会問題を解決する為に様々な取り組みが行われているこの時代、問題解決に向かう中で、いまだに解決に至っていないとある問題があります。

その問題は「いじめ」です。特定の人物に対して心無い言葉を浴びせたり、暴行を加えて怪我をさせたり、集団から仲間外れにして孤立させたりと、された側にはとても深い心の傷を負わせてしまいます。これは、けっして許してはならない行為です。

なぜいじめが起きてしまうのでしょうか。生活環境が影響しているからなのでしょうか。それともいじめという行為に違和感や罪悪感を感じていないからなのでしょうか。

いじめは、発生する状況もパターンも異なります。ただ、個人からいじめを考えてみると「立場の強い者が、弱い者をいじめている」のではなく、「弱い者が、同じ立場にいるはずの弱い者を集団でいじめている」ように見えるのです。分かりやすく例えてみるならば、とある一人の力の強い人が普通の力の人に対して暴力をふるうというよりも、数人の普通の人が一人の弱い人を集団で殴っている方がダメージも大きく、精神的な苦痛も大きいのではないかと考えます。

前者はただの暴行、一方的な暴力です。これはいじめではなく、突発的に起こったことと解釈されてもおかしくはありません。しかし、後者は集団的で方法も悪質。けっして許してはならない行為です。これは、まさしくいじめになるのではないのでしょうか。

では、なぜこの「集団的ないじめ」はなくなるのでしょうか。大人の目が行き届いていないのが原因なのでしょうか。それともやる側に「してはいけないこと」という意識がないか

らなのでしょうか。

もちろん、その可能性は大いにあるでしょう。そもそも、はじめの発生する状況は様々です。自分だけの力では解決できず、どうしようもない状態になってしまいうこともあります。

原因として、私が考えているのは「クラスや環境になじめず、一人になってしまった」ということではないでしょうか。

私は数年前にいじめを受けて学校に行きにくくなってしまいました。一人ぼっちで誰も仲間がいなかったためにクラスに馴染めず、集団から疎外されてしまった結果、最初は少しのちよっかいだった行為がいつしかいじめになってしまったのです。

本当はみんなの輪の中に入っていたいののに、その一步の勇気が出せなくて一人になってしまいました。そのせいでいじめの対象にされてしまうなんて、どれだけ本人にとってつらいことか、皆さんは理解できますか。

私は周りの人の支えによって立ち直り、今では元気に学校へ通えています。ですから、「誰かが一人になってしまった子に寄り添ってあげる」ことこそ、一番のいじめの予防策になるのではないかと考えます。

身近な存在である先生やカウンセラーの先生などの大人が寄

り添ってあげる事で、その子の孤独が解消されるのではないでしょう。

あなたの周りで、一人になってしまった人がいるならば、傍観者にならず、あなたが寄り添ってあげてください。誰かが寄り添うことで、その人は救われるのです。私は、そう考えます。

見方を変えてみたら：



勝田第二中学校 三年

すけがわ 助川
はるな 陽菜

みなさんにとって「友達」とはどのような存在ですか。私にとって友達は、宝物であり、時に大切なことを気付かせてくれる大事な存在です。しかし、友達という関係は突然崩れ、いじめに発展することもあります。小さな出来事が大きなことになり、さらには自殺までしてしまう。このような死は絶対に起きるのではないと思いませんか。私は昨年の道徳で「私のせいじゃない」という教材を読んだから、その内容と実体験を重ねていじめについて考えるようになりました。

「私のせいじゃない」という教材の中には、いじめた人、いじめられた人、傍観者という三つの立場から描かれています。私は傍観者として、知らないうちにいじめに参加したことがあります。

私がある学年の時、学級内で一人の友達が「○○菌」と呼ばれ、その人に触れたら菌が付き、その菌を他の人につける、と

いう最低ないじめが起きていました。当時、そのいじめにはクラスの半分以上の人が参加していました。しかし、私は菌が回ってきても分からないふりをして、自分は見えているだけで、いじめていないと思っていました。しかし今は、とても後悔しています。なぜなら、私は直接関わっていなくても「傍観者」という立場で相手を苦しめていたことに気付いたからです。その子は、学校でよく私に話しかけてくれました。それなのに私は、「大丈夫」の一言も言えずにただ見ているだけでした。直接いじめているところを見ているのに、何もしない傍観者という立場は、私は何て都合のよい立場なのだろうと思いました。いじめられている子を助けられるチャンスがあったのに、手を差し伸べず、何もしなかったことに後悔の気持ちしかありません。だからこそ、これからの学校生活でこのような思いを二度としないように、させないように、もし誰かがつらそうだったら、傍観者という立場を捨てて、思いきって話しかけようと思います。直接いじめの場面に助けに行くことは正直難しいけれど、声をかけることは誰にでもできると私は思います。

そもそも「いじめ」とは、自分とは違うものや個性、考えをもっている相手を知ろうとせず「私たちとは違う」「あの

子氣にくわない」という思いから起きるのではないでしょうか。人は誰だって同じことを考え、行動しているわけではありません。このことを頭で理解することは、多くの人ができると思います。しかし、いざ接してみると、イライラしたり、相手の嫌な部分が見えてくるものです。ですが、私たち人間は考え方や意識を変えることができるのではないのでしょうか。

中学校に入学した頃、周りは知らない人ばかりで、上手く話しかけられませんでした。「この人怖そう」「この人と性格合わない」と、見た目や先入観で判断していたからです。しかし、相手の嫌な面ばかり話す友達の話や話を聞くうちに、「もっと人の良い面を見ればいいのに」と思い始めました。その時から、友達と話すときは、話しながら相手の良い面を探すことを心がけるようにしました。すると、相手のことをさらに知ることができ、自然と仲良くなりました。

このように「この人自分とは違うな」と思うのではなく、「この人の良いところってどこだろう」と考えてみませんか。相手をマイナスに捉えずに、プラスに捉えることが大事だと思えます。お互いを知り認め合えば、いじめもなくなるはずですよ。

私たちはまだ、人の一面しか見ていないように思います。普

段とは違う方向から、友達を見てみてください。必ず相手の新たな面が見えてきます。もし、相手を多面的に見ることができたら、もっと相手と深い仲になれるはずです。いじめのない世界をつくるために、みんなが一歩踏み出してみませんか。

差別のない世界を



勝田第三中学校 二年

たけなか
竹中 愛莉

「差別がなくなることではないの。」私は朝のニュースを見ながら、母にたずねました。私が見たニュースは、白人の警察官が黒人男性を殺してしまった、というものでした。母は少し考え込み、「差別がなくなることはいんじやない。人間は弱い者いじめをしてしまう生き物なのよ。」と言いました。私は母の言葉を聞き、「なるほど。」と思いましたが、同時に疑問がわいてきました。それでは、いつまでたっても差別がなくなることはないではないか、と。

私は、差別につながるようなことを言っている友達を見たことがあります。その人は、黒人の英語の先生に対して、「ゴリラ」などと笑いながら言っていました。当時の私は、とても弱かったですと思います。「やめて。」のたった一言が言えませんでした。その英語の先生は優しい方だったので笑っていましたが、心の中では深く傷ついていたと思います。あとから他の先生に聞いた話では、悪口について悩み、先生をやめようとした、とも言っていました。私は今でも、あのとときの醜い自分をうらんでいます。私に勇気があれば、あのとときに一言言えていれば、英語の先生を悲しませることはなかったと思います。同じようなことが、今もどこかで起きています。差別に悩み、自分を殺そうとしている人が今もいます。自分の発言が、良くも悪くも変わることに、誰かを救うことも殺すこともできることを常に頭において、行動することが大事だと私は思います。

みんな同じ「地球」で生まれ、「地球」で育った「仲間」なのに、差別をするのは、間違っていると思います。肌の色が少し違う「だけ」目の色が少し違う「だけ」文化が少し違う「だけ」。そんな少しの「だけ」で人を区別したり、判断したりするのは、してはいけないことだと思います。言葉は通じなくても、感情を伝えることはできると思います。例えば「笑顔」を見せれば、嬉しい気持ちや楽しい気持ちが伝わってきます。「なみだ」を見せれば、つらい気持ちや悲しい気持ちが伝わってきます。このように人は、感情だけでも分かり合うことができます。素晴らしい生き物なのです。この素晴らしさが、もっと理解されるような世の中になってほしいと思います。

今を変えることはできなくても。未来を変えることはできません。一人ではできなくてもみんなが協力し合えばできることもたくさんあります。誰もがおたがいを分かり合い、尊重し合うことで、少しでも差別がなくなる世界につながればいいと思います。

最後に、母の言っていた「差別がなくなることはないんじゃない。人間は弱い者いじめをしてしまう生き物なのよ。」という発言について再び考えてみました。もう、「なるほど。」とは思いません。人間に、弱いも強いもありません。一人一人の意識によって、みんなが平等に暮らしていけるようになるはずで、まずは自分から、平和な社会をつくるために行動し、百年先、千年先まで伝えていくことが大切だと思います。差別のない世界を目指し、自分にできることを精いっぱいやり遂げられるような、立派な人になれるよう、これから一つ一つ考え、前進していきたいと思えます。

街のゴミを「ゼロ」に



勝田第三中学校 二年

西村 にしむら 拓真 たくま

最近ぼくはよく外に出て歩くのですが、数年前より道に落ちて
いるゴミが多く感じられます。たくさんの方は通っても落ちて
いるゴミに気づかないふりをしていました。僕も数年前まで
はゴミをみてみぬふりをしていました。

でも、ある日いつものように歩いていると一人で黙々と道に
落ちていたゴミを拾っているおじいさんがいました。それをみ
て僕は、街がきれいになってほしいと思う人はいるけど実際に
行動に移せる人は少ないと思い、とても格好いいと思いまし
た。次の日も僕は同じ場所に行きました。すると、
おじいさんは昨日より少しはなれたところでまた昨日と同じよ
うにゴミを拾っていました。僕は思いきっておじいさんに「こ
んにちは。」と言うとおじいさんは優しく「こんにちは。」と返
してくれました。そのときの笑顔は、いつまでも忘れられませ
ん。

その事があって僕は地域の清掃活動や花を道に植える活動な
どに積極的に参加し、街をきれいにする活動に協力するようにな
りました。参加している人は高齢の人が多く、僕が一番若かつ
たので、「中学生なのにえらいね。」と一人のおばあさんに言っ
ていただき、とてもすがすがしい気持ちになりました。

またある時は、僕の家の前道路に近くのコンビニのゴミが
置いてある時がありました。僕はなんでこんなことするのだろ
うと疑問に思い、また少し悲しくなりました。でも、あの時の
おじいさんを思い出して、ゴミが捨てられていても、誰にも言
わずに黙って拾って捨ててあげようと思いました。いろいろな感
情が湧き上げてきましたが、そのときは感情を押し殺してゴミ
を拾いました。

このことを親に話してみると、よくゴミが家の前に置かれて
いることがあるらしく、とくに食べ物のゴミが多かったそうなの
です。僕が貼り紙を貼って、そこに「ここにゴミを捨てない
てください。」と書くのかと聞きました。でも母は、「貼り紙を
貼っても、そのゴミを捨てている人の根本的な心は変わらない
から黙って拾おう。」と言いました。僕も少し納得しましたが、
それで本当に解決するのかと少し疑問にも思いました。

案の定、また二、三週間たったあとにゴミが捨てられました。

とても重要な課題だと僕は思います。

僕はまたそれを拾いました。それからだんだん頻度が少なくなっていく、最終的にはゴミが捨てられなくなりました。

僕は地道にコツコツと物事をやることの大切さを改めて実感したとともに、ゴミのないきれいな街になることのすばらしさを知りました。

家に帰ってそのことを母に話すと、「良かったね。」と言ってくれました。また、「ちよつとの間だけではなく、何ヶ月も何年も持続することが大切だよ。」とも教わりました。

街がずっときれいで美しいものになるには、何人かがゴミを拾うのではなく、一人一人が落ちているゴミを拾うこと、道にゴミを捨てないことなど街をきれいにする意識を高める必要があると僕は考えています。いろいろな身近な経験からたくさんこのことを学びました。街をきれいにするには、単純にゴミを無くすだけではなく、緑を増やすこと、人との交流をすることなどに力を入れるのがよいと知りました。

また、一人一人の小さな行動から大きなものになることを身をもって体験しました。よりよい街のために、街に住んでいる人たちみんなで考え、意識して解決していかなければならない、

幸せに生きるということ



佐野中学校 三年

住谷 すみや
双葉 ふたば

「幸せですか？」この質問に、自信を持って「はい。」と答えることはできますか。不幸せではないけれど、幸せでもないよ。うな。そんな人が多いのではないのでしょうか。私も正直、そんな曖昧な答えになってしまいそうです。「幸せ」とは、一体どんなものなのか。私は、それを確かめたい、確かめなければずっと不安定なままだ、と思うようになりました。

まずは、「自分は幸せ」だと思ふ人はどんな人なのかを知るために、世界百五十六ヶ国を対象とした、『幸福度ランキング』を調べてみました。私の住む日本は、六十二位。日本は、世界有数の経済大国です。命の危険にさらされることも少なく、店頭にはモノもあふれています。それなのに六十二位なのはなぜなのでしょう。

ここで一位だったのは、ブータンでした。ブータンという国がどこにあるのか、どんな国なのかを、私は分かりませんでした。

た。ブータンは医療や教育費が無償で、誰もが平等に暮らすことができるそうです。暮らしぶりを見てみると、人々は伝統的な衣装を身に着け、昔ながらの生活を送っています。経済的な豊かさよりも、精神的な豊かさを重んじている印象を受けました。

ブータンのことを調べていく中で、私は休校中の生活を思い浮かべていました。三月から五月までの長い休校中で、欲しいものを買う場所も機会も無い、ずっと家の中で過ごしていました。単調な毎日でしたが、家族でゆっくりと食事を共にし、トランプなどを楽しみました。両親の、姉弟たちの笑顔を見ると、穏やかな、温かい気持ちになっていきました。「当たり前前の生活が幸せ」だと実感したと同時に、私は恵まれた環境で生活していたことに気づきました。

しかし、何か私の中で引かかるのです。今あるものを大切にすることは、確かに大切です。欲望に振り回されることは、幸せではないことも分かります。でも、「もっとほしい、もっとよくなりしたい」と思うことは、不幸なことなのでしょうか。

休校明けに、さっそく実力テストがありました。私は九割の点数をとることができたので、友達から「いいなあ。」と言っ

でも、私は内心、「一割もとることができなかった！次はもっと上にいきたい！」と悔しさでいっぱいでした。現状に満足できないからこそ、次のステージに向かおうとするモチベーションになりました。

これまでを振り返ると、私はいつも、自分に足りないものに向け、それを自分の目標にして頑張ってきました。目標に到達できない自分に苛立ち、悲しくなることもありましたが、その悔しさのおかげで、努力することもできたし、達成したときの喜びも感じることができました。そして、「幸せだ！」と実感することができました。

きっと、誰でも、周りのひとをうらやみ、自分に足りないものを欲しがってしまうのでしょう。その考えだけに縛られると、確かに「不幸」です。しかし、自分が欲するものを追い求めることは決して不幸なことではなく、むしろ幸せな環境にあると考えるのもよいのではないのでしょうか。

これまで私たちは、周りと比べて「足りないもの」ばかりに目を向け、「幸せ」と実感できないでいました。でも、何かに挑戦する機会や場所があります。よりよいものを手に入れるチャンスがあるのです。「幸福度ランキング」は六十二位でも、

「幸福を手にするチャンスがあるランキング」は、間違いなく上位ではないのでしょうか。

私は、家族や友達と安全に暮らせる「当たり前前の生活」に感謝し、「幸せ」を感じながら、さらによりよい自分を目指して頑張って生きていきたいです。

誰もが深呼吸できる未来へ



佐野中学校 三年

酒井 遙奈
さかい はるな

「I can't breathe! 息ができない!」男性は、警察官に叫びました。そして、助けて欲しいと訴えました。しかし、男性の訴えは届かず、人を救うはずの警察官に、殺されてしまいました。

これは、二〇二〇年五月二五日、米国ミネソタ州の路上で起きた出来事です。助けて、と叫ぶ男性の首を押さえつけて死に追いやった警察官は、白人。そして、無残にも殺されてしまった男性は、黒人でした。

この事件が世界中で報道されると、各地で人種差別に対する抗議の声が高まっていきました。黒人の子どもたちが、「Black Lives Matter」と書かれたプラカードを手に、「私たちだって生きる権利を持っている!」と叫んでいる様子をテレビで見て、私は衝撃を受けました。人種差別?人種差別って、未だにあるの?うそでしょ!なかなか、実感するこ

とができませんでした。

肌の色が違うからと言って、人を差別してはいけない。私は小さい頃からそう教えられてきました。きつと、世界中の多くの人もそうだと思います。それなのに、どうしてなくならないのでしょうか。私は、この問題に強い関心をもつようになりました。そして、情報を収集していく中で、「あ!そうだったのか!」と、ハッとさせられるツイートを見つけました。それは、ある黒人男性が、自分の肌と同じ黒い色のばんそうこうを見つけ、涙が止まらなかつたというものでした。私は今まで、ばんそうこうの「肌色」と言えば、私の肌のような薄いベージュ色が当たり前だと思っていました。確かに、薬局で売っているばんそうこうに、「黒」はありません。でも私は、何も問題とは思いませんでした。「肌色はベージュが当たり前だ」と思い込んで、疑いもしなかつたのです。それが、自分でも、ショックでした。自分がスタンダードだという意識。他の肌の色の人は困るだろうと想像できない思いやりの欠如。これらが、差別とつながっているのではないだろうかと気づかされました。

私の住む日本では、米国のような人種差別はあまり耳にしません。しかし、様々な差別が存在します。その中で、特に私が

問題だと思うのは、「ある国々の人々」に対する差別です。

私が小学校六年生の時、社会科の授業で韓国が日本の植民地にされていたことを学びました。すると、あるクラスメイトが、「韓国の人とは関わりたくないな。韓国の人が身近にいたら嫌だな。」と発言しました。私の体の半分には、韓国の血が流れています。だから、とても不愉快な思いになりました。これは、私の経験だけでなく、「ヘイトスピーチ」のように日本中で聞かれる差別です。肌の色は同じであっても、生まれた国によって優劣をつけたがる。差別はさまざまなところに存在しているのです。

肌の色をよく見てみましょう。全く同じ肌色の人がいるでしょうか。一人一人、違います。国と国の間に、壁のような仕切りが存在するでしょうか。同じ地球の空気を吸って暮らしているのです。

私たちは、誰一人同じではない、唯一無二の存在です。そして、同じ時代を生きる存在です。このことに、みんなが気付いき、当たり前前に思うことができれば、差別はきつとなくなるのではないのでしょうか。

私も、あなたも、そして誰もかも、「I can Breat

h！」と、胸一杯に空気を吸い込み、深呼吸できる世界。そんな未来の実現を、私は決して、あきらめません。

コロナで再発見！給食がくれる幸せ

大島中学校 三年

おおた
太田 玲美



私は給食が大好きです。大人気の二色あげパンも、種類豊富なカレーも、サラダも、旬の食材が入った混ぜご飯も、どれも大好きです。学校に行きたくない日でも、献立表を見ると「頑張ろう」という気持ちになります。

毎日、学校の給食室でつくられた出来立ての給食を食べていることは、私が給食を好きな大きな理由になっていると思います。それが当たり前でないことを知ったのは、小学四年生のときでした。

「外野小学校の給食は、おいしいね。」そうおっしゃったのは、当時の担任の先生です。どの学校でも同じような給食が出ていると思っていた私は、どうして特別おいしいように感じられたのか分かりませんでした。そのことを尋ねると、「前勤めていた学校には、給食室がなかったんだ。こんな風に温かい給食を食べられるのは、すごいことなんだよ。」と、教えて下さいま

した。実際、給食室がある学校は小学校で約六割、中学校で約三割だそうです。

温かいごはんがあること。学校に行けば誰もが味わえると思っていた喜びは当然ではないという気付きは、とても大きな衝撃でした。同時に、残った給食が前よりももったいなく見えてきました。

中学生二年生の冬、私はあるニュースを見つけました。余った給食を無断で持ち帰った大阪府の教師が、懲戒処分を受けたというニュースです。正直私には、何が悪いのか分かりませんでした。学校で給食を残す先生より、「食べ物を粗末にしない」という教えに沿った行動をとった姿に、好感が持てました。そして私と同じように、そんなに悪いことなのかと疑問を持つ人もたくさんいました。しかしもちろん、そのような意見だけではありません。食中毒が起きる危険性を訴える意見や、個人的な判断で行動した責任を問う声もありました。確かにその通りだと思います。だからこそ、社会や学校全体で協力してどうにかすべきだと考えるようになりました。

そんな中、コロナウイルスの感染を防ぐための休校が始まりました。休校中、テレビで注目されていたのが、農林水産省の

支援による未使用の給食販売です。送料無料の販売で、多くの商品が売り切れていました。おいしい給食の無駄にならなかったことが、すごく嬉しかったです。

では、茨城県内ではどのような取り組みが行われていたのでしょうか。皆さんは、「ヨーグルトドライブスルー」を聞いたことがありますか。何だか、思わずうきうきしてしまう響きですよね。これはコロナ禍の中、ヨーグルトの町、小美玉市で発案されました。安全面が考慮され、ドライブスルーになっていることで、ほぼ非接触の販売を実現しています。このドライブスルーでは、給食用ヨーグルトが売られました。休校でヨーグルトが食べられなかった子供たちと、ヨーグルトを生産することができなかった製造会社とをつなぐ役割を果たしたのです。

また、コロナウイルスの関係で飲食店などに出荷できなかった県産の食品、例えば、奥久慈しゃもや牛肉を給食で提供する取り組みも行われています。学校で出た「奥久慈しゃもの親子煮」は、いつもの鶏肉とはちがった味と食感が魅力的で、絶品でした。コロナウイルスがなければ気付くことのできなかった地元食材の良さだったのかもしれない。このような給食を食べられたことを、ありがたく思っています。

ひたちなか市は、ほしいものが有名な町です。毎年一回給食に出る「ほしいも入りかきあげ」は、他のどの地域でも味わえない最高のメニューです。奥久慈しゃものようにひたちなか市のほしいものおいしさも、もっと多くの人に知ってほしいです。そして、給食を食べている私たちも…こんなおいしい給食を食べられること。誇れる特産品であふれた町に住んでいること。自分がどれだけ恵まれた食生活を送れる環境にいるのかということを理解すべきだと思います。私に食への感謝の気持ちも地元の素晴らしさも教えてくれたのは、給食でした。食品ロスが問題になっている今、未来ある子供を育てる学校がこの問題に向き合うことが大切なのではないでしょうか。私たちにできるのは、給食をおいしく食べて、毎日元気に過ごすことです。当たり前なことかもしれませんが、そんなささいなことから未来は変えていけると、私は思います。

これからを生きるために



大島中学校 三年

堀江 ほりえ 李羽 りは

皆さんは「テリーフォックスラン」をご存知ですか。これは十八歳で癌により右足を切断した青年、テリーフォックスが癌研究の資金を募るために、「マラソンオブホープ」希望のマラソンとして義足でカナダ横断を目指した、チャリティーイベントです。しかし彼は夢半ばにして癌転移により、マラソンを断念せざるを得ませんでした。そして二十二歳という若さでこの世を去りました。しかし、彼の遺志は人々によって引き継がれ、今もテリーフォックスランは世界中で行われています。

私は昨年カナダに留学をしました。留学先の学校で、最初の大イベントがこのテリーフォックスランでした。それから毎月のようにいろいろなチャリティーイベントが開催され、私のドネーションへの意識は大きく変わっていきました。ドネーションとは直訳すると、寄付、募金といった意味ですが、私は思いやり助け合いの精神でもあったと思います。

例えばヘアードネーション。病気などで髪を失った人のために髪の毛でウィッグを作り無償で提供する活動ですが、カナダではヘアードネーションの日には、子どもからお年寄りまでたくさんの人が美容室を訪れ、髪の毛を寄付しています。その様子がテレビで一日中放送されていました。日本ではメディアでもあまり取り上げられていないせいかまだまだ認知度が低いような気がしました。カナダでは他にもたくさんチャリティーイベントがありました。特に私が考えさせられたのがグリーンシャツでした。二〇一八年四月にカナダのアイスホッケーチームのバスが交通事故にあい、選手の半数以上が亡くなりました。そのチームの一人が生前、臓器提供者になる事を両親に伝えていた為、彼は六人もの人の命を救うことができました。それから、彼に影響された人々が臓器提供のドナーに登録しました。その数はなんと十万人。そんな奇跡が起こった四月七日にはチームのイメージカラーの緑にちなんで町中の人々が緑のTシャツを着て一日を過ごすという、とても大切な日です。その一方で日本は臓器提供者の意思表示をしている人が約十二・七%と、世界的にみてもまだまだ低いことが分かります。私自身、ドナーになることについて考えてみましたが、やはり

恐怖心もあり、悩んでしまいます。でも、その可能性について考えることができたので、すごくいい経験になりました。

そして私が一番感銘を受けたことがあります。私の通っていた学校では生徒が主体となりチャリティーイベントが開催されることです。イベントでは、歌やダンス、演技が披露され、毎年それを見にくる先生、保護者、地域の方々で席はうめつくされています。また、教師たちがパフォーマンスを披露するといったイベントも行われていました。それからイベントの入場料として集められたお金は募金として、世界の教育を受けられない子どもたちのための手助けにと、送られていることを聞き、私はとても感動しました。そして私にも何かできることがあるのかもしれないと、考えるようになりました。

日本には「出る杭は打たれる」という言葉があるように、何か特別なことをしたり、目立つようなことをすると、あまりよく思われない風潮があるように感じます。しかし、これからの時代はグローバル化に伴い、多様性を受け入れられる人になっていかなければならないのではないかと思います。私は今の自分に何ができるか考えました。まずは、生徒会の協力のもと、生徒、先生、保護者、地域の人を巻き込んで、チャリティーイ

イベントを開催したり、市内の各学校の生徒会が集まる生徒会サミットで何かを企画するなど規模を広げていきたいです。私は、できることからとにかく行動に移さなければ何事にも先には進まないと思います。誰しも初めてのことは怖いけれど、恐れず、自分を信じ、周りの助けを借りて、行動したいです。そして、そういった人がいたら、私も力になってあげられる人になりたいです。

大人へと成長するために



田彦中学校 三年

藤咲 ふじさく

拓陸 ひろむ

私は中学生です。中学生には二つの立場があります。それは、子どもの立場と大人の立場です。例えば、中学生が電車に乗る時は、大人料金を支払いますが、遊園地の入場料は大人料金だったり、子ども料金だったり、施設によって異なります。

そこで私は、一つ疑問に思うことがあります。それは、「なぜ中学生には二つの立場があるのか」ということです。私は、中学生とは、子どもから大人へと成長する途中の存在だと思えます。だから、まだ子どもかもしれないけれど、大人としてふさわしい考え方や行動をし、自覚をもつことができるようになるために、二つの立場が与えられているのではないのでしょうか。それでは、大人としてふさわしい考え方や行動とは、いったいどのようなことなのでしょう。私は、大人になるために、大人といえる言動とは何かを考えてみました。

現在、日本は、新型コロナウイルスの影響によって、外出自

粛や休業要請が求められています。しかし、ニュースでは、休業要請に従わないパチンコ店や、河川敷に集まってバーベキューをする大人の姿が伝えられています。これは、大人としてふさわしい行動といえるのでしょうか。パチンコもバーベキューも不要不急のはずです。

私たち中学生も同じように外出自粛を求められ、学校が休業になり、自宅学習の日々が続いていました。自主的に学習を進めなければなりませんでしたが、なかなか勉強に集中できなかったり、時間が守れなかったりしていたのが現実だったと思います。そういう私も、苦手な課題を後回しにしたり、自主的な予習などには取り組めなかったりと、周囲を批判できる立場ではありませんでした。意志が弱かったのです。普段は決められた時間割で先生の指示に従って行動しているので、自主性を求められたときに、なかなか自分で考えて行動することは難しいと、今回の自宅学習の経験から学びました。

このようなことから私は、大人になるとは、強い意志、信念、責任を持つことだと考えました。そのためには、三つの力が必ず必要だと思います。

一つ目は「聴く力」です。休業要請に従わないパチンコ店や、

外出自粛に従わない大人のように、人の意見を聴くことができ
ないのは、大人としてふさわしいとは思えません。自分を制す
る強い意志がないのです。子どもは自宅で自主学習を強いられ
ているのですから、大人は、子どもの手本となる行動をとるべ
きなのではないでしょうか。

二つ目は「考える力」です。人の意見が本当に正しいのか、
自分で判断することが大切だと思います。時には、人の意見に
否定的になることもあるかもしれませんが、その時は、なぜ否定
するのか、その根拠をしっかりと考え、説明する必要があると
思います。そして、自分が正しいと思うことは信念をもって、
貫く強さが必要だと思います。

最後に三つ目です。それは、「行動する力」です。自分が正
しいと思ったことを、実行できる力が一番大切なことだと思
います。そのためには前にも述べたように、強い心が必要になっ
てきます。「行動する」には、大人としての責任が伴います。
そこから逃げず、大人とは言えないと思うのです。

子どもと大人という二つの立場が与えられている中学生であ
る今、私は、「強い意志」、「信念」、「責任」をもって、いろい
ろなことに挑戦し、「聴く力」「考える力」「行動する力」を身

に付けていきたいです。これから経験を積み重ねこの三つの力
を強く身に付け、大人としての自覚をもった社会の一員へと成
長していきたいです。私は、このことを、公にし、自分に約束
したいと思います。

楽器がくれた笑顔



田彦中学校 二年

佐藤 さとう ゆりこ

「楽器が出来てもなんのメリットも無くない？無くなったっていいと思うけどね。うるさいだけだし。」友達にこのようなことを言われたことがあります。私は、三歳頃からピアノを習っています。また中学生になって吹奏楽部に入部してアルトサクソフォーンを吹いています。しかし、この長い間続けてきた楽器を一度も「無くなったっていい。」と思ったことはありません。楽器があったからこそ今の自分がいます。

私がピアノを始めたのは、テレビで見たピアニストがきっかけでした。そのピアニストがピアノを弾いている姿に自然と笑顔をもらいました。その当時、私は幼かったのではつきりとは覚えていませんが、今になってもそのピアニストを見るたびにたくさんの笑顔をもらっています。今では、初心者の方のピアノや小さい子たちのピアノなど誰のピアノでも元気をもらいます。悲しい時でも笑顔にしてくれる不思議な力をピアノはもつ

ています。しかし、不思議な力をもっているのはピアノだけではないことを吹奏楽部に入って知りました。現在、私が吹いているアルトサクソフォーン、そして他の仲間が演奏している管楽器、打楽器など様々な楽器がこのような力をもっていました。私は小学生の頃、友達と上手いかなかった時がありました。意見のすれ違いのけんかでした。そして、けんかしてから話すのが気まづくなってしまいましたもとの関係がこわれてしまいました。

しかし、小学生で最後のクラスのお楽しみ会で自分の特技をペアを組んで発表しようという企画でそのけんかしていた子とピアノの特技が一緒にペアになりました。

やはり、最初の練習はとても気まづい空気でしたが、一緒に練習するにつれてピアノの話で盛り上がりけんかする以前よりも仲良くなることができました。この時、楽器をやっているとよよかったと思ったことを覚えています。このエピソードのように私が、なにかあった時、くじけずに前へ進むことができたのは楽器があったからです。

そして、吹奏楽部でたくさんの仲間と楽器を吹いている今、たくさんのお客さんから「感動した」「ありがとう」とメッセージ

ジをもらいます。そのメッセージを聴くとうれしくなって「楽器をこれからも続けたい」と思うことができます。他の仲間も私と同じように思う人が多くいるのではないかと思います。

このように、私は楽器が演奏できる環境で育ちましたが、世の中には楽器の騒音が原因での近所トラブルなどたくさんの課題があるのも事実です。大きなニュースになることだってあります。私は楽器の音を騒音だとは思いませんが、楽器の音が苦手な人が楽器の音を騒音に分類してしまうのも分からなくはありません。しかし、楽器を演奏していて元気をもらったり、他の人の笑顔のために努力をしている素晴らしい人たちであるのもたしかです。私のように楽器の音がくれる笑顔が幸せな人だっただけたくさんいると思います。このような楽器の素晴らしさをたくさんの人に理解してほしいです。

楽器が原因でのトラブル、事件を身近に感じない人もいます。は思いますが、これは全ての人達に考えてもらいたい問題です。そのトラブルの楽器を演奏している立場の気持ちを少しでも考えてみてほしいです。

このような音を騒音だと思わず、少しでもポジティブに楽器の音を受け入れてくれる人が増えてほしい、このようなことで

トラブルにならないでほしい、というのが私の願いです。私は、楽器が本当に大好きです。楽器と出会うことができると本当に幸せです。私のこの主張がきっかけで一人でも心が動いてくれたら、この世の中も少しは変わると私は信じています。私も毎日笑顔にしてもらっている楽器に感謝をして、今度は、他の人に私の楽器の音で元気になってもらえるように努力していきたいと思えます。

この楽器との出会いがくれた私の笑顔の主張が皆さんの心に響いてくれると信じています。そして、楽器や音楽を通じて、人と人のつながりが生まれ始まり、より生きることの楽しさを味わえる社会に発展することを願っています。

ベストをつくす楽しさ



那珂湊中学校 三年

久保田 真尋
くぼた まひろ

皆さんは、目の前に一生懸命頑張っている人や、夢中になって楽しんでいる人がいたらどう思いますか。すごいな、と感心する？頑張れと応援したくなる？自分も頑張ろう、と励まされる？私の周りでは、それを見て笑ったりひやかしたりする人が少なくありません。一生懸命頑張ることはとても良いことなのに、私もこのようにならかれて嫌な思いをしたことがあります。そこで、何故このような状況になってしまうのかを考えてみました。すると、考えられる原因がいくつかありました。

まず、最初に考えられるのは、単に馬鹿にしているということです。私が実際に見たり聞いたりしたことがある例として、ある授業でAさんが課題に対して一生懸命取り組んでいるのを見て、Bさんが「なに本気になっちゃってんの。」と笑ったことがあります。この出来事から、私は、自分よりも劣っていると感じた人に対して馬鹿にするという傾向があると思いました。

ところが、部活動、体育祭などの学校行事では、一人一人に個性や得意、不得意があるにも関わらず、そんなトラブルは起きません。むしろ学校中が熱意にあふれ、一人一人が応援しているような気さえします。このことから、私は、人を馬鹿にするような行動をするかどうかは周りの状況に左右されることに気がつきました。

行事では、周りも熱心に取り組んでいるから一人だけ目立つことは少なく、また、お互い頑張っている者同士だから、馬鹿にするなどあり得ません。でも、周りが消極的であったら、頑張っていると浮いているように見えてしまいます。このように、いくら良いことをしていても、周りによって見方が変化してしまうことや、周りを気にして行動しなければならなくなるところはおかしなことだと思いました。

次に、一生懸命取り組めない理由として一番可能性があると考えるのは、物事に対して消極的であることが当たり前になっているということです。今まで私が述べたことが、この最後の原因へとつながっていると聞いていいでしょう。「一生懸命取り組んだら誰かに笑われる。」「次からは気をつけよう。」「そして、今度は、それによって目立った人をからかい、その人も

同じようになる…。」といったことになっているのかもしれない。別にいじめているつもりはありません。ただ、からかっているだけ。それでも、これが当たり前になってしまったら、多くの人が傷ついていってしまうと思います。

私の数学の先生も「私たち中には、壁にぶつかると挑もうとせず、諦めてしまう人が多い。」と言っていました。また、私の母も、「自分のキャラとか周りとか気にしないでいいんじゃない？頑張っている人が何か言われるのはおかしいし、そんなことを言う人は気にしないでいいよ。」と言っていました。母の発言には、共感するとともに、もしかしたらからかわれる人が親しみやすく、色々な言葉をかけやすいことも関係するのではないかと思いました。

最後の原因に関しては、それまでの原因から考えた間接的な根拠ですが、最も重要視するべきことだと言っているでしょう。

学級訓などで「全力で」とか「ベストをつくす」といったものを見かけますが、物事に一生懸命取り組むことは恥ずかしい、おかしいという風潮がある限り、当然学級訓通りに生活できたなんて言えません。それは、「表面上の」学級訓であるだけです。

一生懸命取り組んでいる人の邪魔はしないでほしいです。そ

して、「楽して勝つ」ではなく、「ベストをつくす」という楽しさや喜びを感じる私たちでありたいです。

コロナウイルスとの共存



那珂湊中学校 三年

眞家 まいえ
湮彩 りさ

東京都で、新型コロナウイルスの新たな感染者が百人超えと連日報道されています。非常事態宣言解除後、感染者の急増に不安を覚えます。否定の報道がされるも、拡大の第二波が心配です。ウイルスとの共存を前提に社会経済活動を本格化されるのを第一に、外出自粛や休業要請などの行動の制限はされていません。都内の感染拡大を目の当たりにすると、本当に経済重視で大丈夫なのでしょうか。

茨城県は東京都にも近く、茨城県でも再び感染者が確認されだしました。「東京都との行き来が一つの感染リスクになりつつある」との報道を見ました。茨城県でも感染防止と経済活動の両立を重視し、外出自粛や休業要請などの一律の行動制限は求めず、学校も通常登校のままとしています。都内への移動などに注意を呼び掛けるものの、県を越えてはならない等強い自粛を求める事はありません。状況が悪化した場合は要請する、

との事ですが、果たしてそれで間に合うのでしょうか。「後悔先に立たず」そんな状況にはなつてほしくありません。

ある程度の感染再燃があつても、自粛・休業への後戻りは極力避ける基本姿勢と感じます。リスクを伴う経済的判断なのにメリットとデメリットは伝わってきません。きちんと説明するべきだと思います。専門知識のない私たちは余計に不安になります。「要注意です」とアナウンスされても実際にどうすればいいのか分かりません。私たちが出来る事は限られています。

長い休校生活も終わり、ようやく学校生活が始まりました。今までにはない新しい生活様式を求められ、何にしても不安は募ります。先のことからならず、たくさんの方が現実を見ずにいます。しかし、私たちは受験生であり、この状況を乗り越えていかなければいけないのです。今まで経験したことのない事態だからこそ、新しい方法でこの局面を乗り越える柔軟さも必要だと思います。

そこで、私はある提案をしたいと思います。それは「九月入学」です。みなさん一度は耳にしたことがあるのではないのでしょうか。九月入学とはその名の通り、九月に学校に入学する事をいいます。

この提案のメリットとして、真冬の受験期に流行する感染症にかかるリスクを下げ、大雪による事故を避けられる事が挙げられます。また、休校による教育課程、学校生活の遅れや空白を取り戻せます。他に、日本教育のグローバル化により留学がしやすくなります。ペースを速めていた授業などによる勉強への不安や刻々と近づく受験への不安が解消されると思います。準備時間を確保することができます。現段階では有効な治療薬もワクチンも開発されていません。また、時間が奪われる可能性だってあります。私たちは休校期間で失った時間を急いで埋めるのではなく、受験時期をずらして時間を確保し受験を迎えたいのです。

しかし、デメリットもあるのは事実です。教育現場への負担や家庭の費用負担が増加することも想像できます。

この提案は受験生である私からの意見の一つです。大人の方たちにはたくさんの反対意見があると思います。ただ、私たちが安心して次のステップに進む環境があることが重要なのです。

「普通に学べる」事がありがたいことに気付きました。年度内にカリキュラムをこなせばよい、という量の教育でなく、一

つ一つ理解するという質の教育を受けたいです。前向きに検討してもらいたいと思っています。

命の大きさ



平磯中学校 三年

かわさき
川崎 じゅきや
寿樹也

皆さんの中には、動物を飼いたい、または飼ってみたいと思っている人は居ませんか。そんな人に、一度考えてもらいたいことがあります。それは命の大切さです。

僕の家では、一匹の猫を飼っています。猫の名前は「マック」といいます。今では、家に居なくてはならない大切な家族の一員です。

僕がマックと出会ったのは、小学一年生の時の秋の事でした。マックはペットショップで買ったものでは無く、知り合いの人の家で産まれた猫をもらって来たのです。そのため種類ははっきりと分かりませんが、それでもとてもかわいく、大切な命です。

ペットショップに売られている動物を見ると、考えてしまうことがあります。それは、ここで売れなかったりするとこの子たちはどこにいつてしまうのだろう、こんな狭い所で過ごして

いて、ストレスなどは無いのだろうかということですが。

そして僕は、ごくまれに見る捨て犬・捨て猫・保護犬・保護猫のニュースがとても気になっています。調べてみると茨城県は全国で二十八位など処分数が上位にあることが分かりました。この状況を変えるためには僕たちが行動を変える必要があります。例えば、ペットショップで動物を買うより、保健所などで引き取るということです。

そういう思いから来た「マック」はペットショップで買った子ではなくても、とても良い子に成長しています。

また、僕たち一人一人が責任を持って動物と関わっていかないといけないと思いました。

責任をもっていくというのはその動物の命を軽く見たりせず重く考えたり、動物の命を最後まで育ててあげたり、見届けてあげたりすることだと思います。

今動物を飼っている人、これから動物を迎え入れたいと考えている人に僕は強く命の大きさを伝えたいのです。

動物を飼うことは、決して簡単ではありません。動物が生きるために必要な水やごはんは動物に合ったちょうど良い分量を考える必要があります。多ければ太ってしまいますし少なすぎ

るとガリガリにやせてしまうと思います。旅行などに行く時はその行く日を考えて水を置いていたり、ごはんをおいていくしかありません。しかし、トイレの掃除などもしなければいけないので、あまり長く家を空けることは好ましくありません。人間の都合だけを考えて生活していくことは出来なくなってしまう。

しつけなど、大切なことも増えていきます。トイレの場所、人をおかみつかないようにすることなどを教えないとわがままな動物になり、最終的には誰の言うことも聞かなくなってしまう。そうやってしまうと、飼い主が苦勞することはもちろん、その動物もかわいそうです。どれだけ可愛くてもだめな物はだめとしつかり叱らなければいけないと思います。

マックも、出会ったばかりの頃は、イタズラをしたり、僕にかみついたりしてきました。ですが、母と根気強くしつけをすることで、とても良い子になってきました。そんなマックのことがいとしくてたまりません。

しかし、動物を飼っている人の中には心ない行動をとってしまふ人もいます。それは、飼っている動物の毛にスプレーで色を染めたというものです。その動物は元気をなくし、とぼとぼ

と歩く姿はとてもかわいそうでした。

動物は、人間の自己満足を得るための道具ではありません。このように道具のように扱うことは動物を見下す卑劣な行為としか思えません。動物を飼う人たち、飼っている人たちには、もう一度自分の動物への接し方、関わり方を見直してほしいです。また一つの命を預かる責任というものを考えてみてください。

僕はこれから先も「マック」を大切にしていきたいと思えます。

セルフ・ハンディキャッピングからの脱出



平磯中学校 三年

飛田 とびた
汐音 しおん

「多分うまくいかないけど、一応やってみます…。」「難しいかもしれませんが、試してみます…。」「でも答えが違ってたら恥ずかしいから、手は挙げられない…。」こうした、前もつてする言いわけのことを心理学では、「セルフ・ハンディキャッピング」と呼ぶそうです。驚くべきことに、このセルフ・ハンディキャッピングをしてしまうと、物事の成功率が下がってしまふそうです。

私も、学校での授業中自分から積極的に手を挙げることはなかなか出来ません。だからと言ってまったく挙げないわけではありません。「この問題の解答はこれだ。」「この単語の意味はこういう意味だ。」と自分でも正解しているはずだと確信している時は、自信を持って手を挙げ発表することができます。でも、「本当にこれでいいのかな。」「間違えていたらどうしよう。」「などと思っている時は、手を挙げるのが難しくなってしまう

ます。

なぜ、セルフ・ハンディキャッピングをすると、成功率が下がってしまうのでしょうか。前もつて失敗してしまう言いわけすることによって、無意識の内に「失敗してもOK」という考えを持ってしまい、困難に直面した時に簡単に諦めたり、妥協をしたりしてしまいます。それはとても怖いことだと思えます。これらは、自分を守る行動ですが、結局はその場しのぎでしかなく、長い目で見たら損をしているかもしれません。

私は、本を読んで考えました。自分が損をしない為に、どうすれば良い方向に向かって行けるかと。それは、「できます」「やります」「なんとかします」と言ってみる事だと思えます。そうすることで、成功に近づくことができます。人は、自分の発言や行動に一貫した言動をとろうとするそうです。言葉と行動が一致しない人は、社会において嘘つき、適当な人、軽薄な人と見られてしまいます。そのような不名誉な評価をされないように、自分の立場や言動と一貫した態度をとるようになります。

誰でも、前向きに物事を進めていきたいという気持ちと不安な気持ちは両方あると思います。それでもあえて、前もつて強気な発言、勇気がある発言をすることにより、その後の行動自

体も発言に引つ張られて、結果的に成功する可能性が高くなつていきます。最初は少しずつでいいので恐れず、怖がらず、前向きに挑戦していくことが自分にとっての成長につながると私は感じました。

私は、今、授業中に積極的に手を挙げるよう努力しています。ある日の数学の授業での出来事です。先生がどのような形で表せるかと問いました。そして私は、これだなと思い手を挙げて発表しました。解答は間違つてはいなかったのですが、私は、一つ先の解答を答えてしまいました。でも、その私が答えた解答の所まで進むと、先生が、「さっき汐音さんが言ってくれたのがここに当てはまるな」と言ってくれました。失敗はしてしまいましたが、その失敗も授業に役立ててもらえたことで、勇気を出して発表してよかったと感じ、自分を褒めることができました。

「やります」「できます」とハッキリ言うことは非常にプレッシャーがかかるので、言うのは勇気が必要です。そう、勇気です。万一宣言して、できなかつたら、どうしよう…なんて、余計な事は考えない事です。ここにいるみなさんに私は、前向きにポジティブ思考でいくことが大事だと伝えたいです。宣言し

て、それに向かつて突き進む過程も大切なのです。良い結果は、こうした勇気をもった行動をするからこそ、得られているのだと思います。

みなさん、ぜひ今日から、セルフ・ハンディキャッピングから脱出して、「できる」という勇気を持って取り組んで行きましょう。私も、残り少ない中学校生活一日一日を大切に、勇気をもって前に進み、一生懸命頑張つていきます。

コロナに包まれた世の中



阿字ヶ浦中学校 三年

おおくぼ
大久保 歩夢

みなさんは緊急事態宣言での外出自粛中、どのように過ごしていたでしょうか。ニュースで報道されていることが次々と変わっていった、みなさんも混乱したことでしょう。行きたいところにも行けなく、友達にもなかなか会うことができなくて、ストレスや不満が溜まっていったと思います。そして、よく知っている有名人の方々がコロナの感染が原因で亡くなっていった、悲しんでいる方も少なくはないはずです。このようなニュースを見ていたときに、私の母はこんなことを言いました。

「今はこんなことになっているけど、最初の頃は、まだ人数も少ないし大丈夫だろう、すぐ終わるだろうと政治家の人達は軽く考えていたみたいだよ。」

この言葉を聞いて、私は驚きを隠せませんでした。さらにテレビを見続けていると、コロナに感染してもいいからパチンコ

をしたいと言っている人たちや、客を自宅に招いて賭け麻雀をしていた人もいるというニュースが目に見え込んできました。

このニュースに私は怒りが芽生えてきました。他の人々が我慢をしている中、なぜこのようなことをするのだろうと思いましたが。しかも、後者の人の行為は、法的にもよくないことです。

私はこれらのことから、この他にどのような問題が起こっているのだろうと興味をもちました。そこで、このコロナに包まれた世の中で、政府が発表した緊急事態宣言によってどんなことが起きたのかを考えてみました。

まず、メリットを考えてみることにしました。一時急増したコロナ感染者は、自粛によって少しずつ減っていきました。医療崩壊が深刻なレベルにならなかったこともメリットの一つだと思います。一方、デメリットは、このコロナ騒動をきっかけに悪質な事件が起こってしまったことや、発表された後に、他の県などに移動して逆に密集してしまっている人達がいることなどだと思います。先ほどのパチンコ店の話がその一例です。また、経済が止まって収入に影響が出てしまっている人がいること、そして、私達のような学生は、休校や分散登校などで授業が進みにくくなったり、当たり前前に会えていた友達と会うこ

ともできなかつたりしたことなどが挙げられます。

実は私は、家庭の都合上、学校が自由登校を行っている中でも、ずっと外出を自粛していました。一人ではなかなか集中できず、課題が思う様に進まなくて、「はやく学校に行けるようになってほしいな。」「みんなにはやく会いたいな。」と、ずっと考えていました。しかし、親の仕事上の問題や自分の持病のこともあり、自分も納得していたので、その時はただ我慢するしかありませんでした。世の中にはきっと私のように行きたくても登校できなかった人もいたはずです。私は友達と会えない期間、とてもさびしい気持ちでしたが、同じ気持ちだったのではないでしょうか。

久しぶりに登校ができてクラスのみんなや先生に会えた時、私はとても嬉しかったです。そして、友達や先生は休校前と何も変わらず優しく接してくれました。だからみなさんの周りにも登校できずにいる人がいたら優しく接してほしいと思います。

五月二十五日頃に、緊急事態宣言は全面解除されましたが、だからと言ってコロナウイルスが完全になくなったわけではありません。いつ、またコロナの影響で事態が深刻になるか分か

りません。また登校することができない日が来るかもしれせん。

飲食店で食事をしたいの分かります。友達と一緒にテーマパークで遊びたいのも分かります。シヨッピングを楽しみたいのも分かります。夜景を見たり、サーフィンをしたりするのも。パチンコや競馬でドキドキを味わいたいと思うことは……正直よくわかりませんが、楽しみたいことは分かります。しかし、これからはそのような日常生活もお互いが感染しないように気をつけながら過ごしていかなければなりません。楽しみたいだけでは、集団感染などの恐れがあるからです。人が集まる場所では、いつでも思いやりが必要です。私は、人が生きていくうえで最も大切なものは、自分が信頼する人や大切にしている人の存在だと思っています。みなさんも、誰かにとってそんな存在になっているはずです。だから、自分の命を大切にし、大切な人の命も大切にしてほしいのです。

人と話し、人と関わることができるといふ事は、人にとってとても幸せなことなのです。その幸せなことが当たり前前に続いていくために、私たちにできることを、考えていきませんか。

大切なこと



阿字ヶ浦中学校 三年

しば
ことの
柴 琴理

今、世界は新型コロナウイルスの影響で混乱におちいり、たくさんの方が不安を抱えています。どこにも出掛けることができず、学校で授業を受けることもできず、家族以外の人と会う機会もなく、ただただ課題をやるだけの毎日。とてもつらかったです、さびしかったです。また、受験生であるにもかかわらず、ダメだとわかっていても忘れてしまう自分になんか嫌気がさしたり、腹が立ったりと、矛盾した日々を送っていました。しかし、一見何の収穫もないように思える休校期間でも、私は様々な大切なことに気づくことができました。さて、私が休校中に気づけたこととは一体何でしょうか。

まずは、受験生としての自覚です。初めにも書いた通り、休校中の私は勉強を疎かにしていました。すると、そんな私をずっと見ていた母のすすめで、学校に行くことになり、通い始めてからは、私と同じような理由で学校に通っている友達とお互い

に刺激を与え合いながら勉強を進めました。また、その期間中、人が少なかったこともあり、担任の先生と様々な話をしました。その中で最も話をしたことが受験についてだったのです。それぞれの高校の特徴や勉強法などをたくさん教えていただきました。そして、そのような話をしていく中で、徐々に私にも受験生としての自覚が芽生えてきたのです。今はまだはつきりとは行きたい高校があるわけではありませんし、県立高校の見学をする機会が限られてしまったため、とても悩んでいます。しかし、将来就きたい仕事は、はっきりしています。だから、その仕事に就くために最善な道を考えながら将来後悔することがないようにしっかりと勉強します。

次に、SNSの危険性についてです。家にいる期間が長かったため、SNSを使う機会も増えました。その中でもよく私の目に止まったのは、一人の人に対する多くの人からの誹謗中傷です。犯罪を犯したわけでもないのに、疑惑や想像だけで、人の心に突き刺さるような見たくも聞きたくもない言葉をいとも簡単に溢れさせる。まるで集団によるいじめのようでした。そのせいで亡くなったと思われる方のニュースも見ました。周りを見渡してもSNSを使っていない人をほとんど見かけないよ

うな今の世の中。その世の中を生きる人々は、どのようにSNSを使うのが正しいのか、みなさんに考えて欲しいと思いますし、自分でもSNSの危険性について改めて深く考えることができました。

最後は、友達の大切さです。もともと人数が少なく、小学一年生から今までずっと同じクラスで毎日を過ごしてきました。

みんながどんな人なのかお互い知っているし、みんなを信頼しています。そんなみんなと会えないとさびしかったし、いつも元気が出せませんでした。唯一みんなと会えるのは週一回の登校日のみ。その日はみんなが生き生きしているように見えました。

ですが私達は中学三年生です。しかも私達の学校は今年をもって閉校します。このような年に、修学旅行も行けるかわからず、体育祭や生徒祭などの行事を行えるかもわからない。悔しいの一言です。もっとみんなと三年生らしく充実した毎日を送りたいかった。これがみんなの本音だと思いますし、特に私達のために色々なことを計画したり、いかにして私達の笑顔を引きたすかを考えてくれている学年主任の先生や担任の先生などたくさんの方には申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。

た。それでも、私達は前を向かなければいけないと思います。いつも何事にも期待をしない私ですが今回ばかりは、悪いことが起きたら必ずそれ以上の良いことが起きると信じます。

みなさんは今は幸せだと感じているのでしょうか。私は、なんだかんだ言って結局幸せだと思います。たくさんつらいことはあるし、行き詰まることもあります。それでも、信頼できる大切で大好きな先生達やみんなと出会えたこと自体が幸せだと気づきました。そんなみんなや先生達と一緒に過ごせるのも残りわずかです。だから、一日一日を、そして人と人との関係を大切にしながら、屈託のない最高の笑顔で卒業式を迎えたいです。早く新型コロナウイルスの感染が収束しますように。

「ひたちなか市少年の主張大会」講評

ひたちなか市教育委員会教育長

野沢 恵子のざわ けいこ

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、長期の学校休業や自粛生活、さらには学校行事の縮小や削減など今までにない生活をしている中で、それにも負けず中学生が何とか困難を乗り越えようとする前向きで勇気ある純粋な考えと思いに勇気をいただきました。これからの社会は、予測できない社会の変化を前向きに受け止め、主体的に向き合い、関わり合い、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となるための力が求められています。

発表者のみなさんの主張は、身近な生活から気づき、原因を追究し、自分なりの改善点と決意を述べていました。さらに自らの体験を通して自分を見つめ直し、これから目指す自らの方向を堂々と述べており、どの主張も心に響く内容ばかりでした。まさに、これからの時代に必要とされる資質、能力が今の中学生の中に芽吹いていることを感じ、とても嬉しくなりました。

では、ここで、一人一人の発表に対して、

短い言葉で恐縮ですが、一言ずつ感想を述べさせていただきます。

「海洋プラスチックごみ問題」

勝田第一中学校 照沼若奈さんてるぬまわか

身近な気づきから、原因を追究し、さらにもう一度自分の周りの生活を見直し、自ら考えた改善策を提案しているという、実に説得力のある主張でした。ノーベル平和賞に二度ノミネートされたホセ・ムヒカ氏は、「人間がたとえどんな困難があろうともより良い世界を築くためには、世界から過酷な貧困を取り除くこと、そして浪費をやめること」と言っています。さらに、「自覚を持ち助け合えば、世界は変えられる」とも言っていました。そして「発展と言うものは、人類の本当の幸福を目指さなければならぬ」と言っています。照沼若奈さんが主張するように、便利なものに頼りすぎず、一人一人が地球のために取り組む社会が実現できるようにしていきたいでしょう。

「生きやすい社会を」

勝田第一中学校 杉元来羽さんすぎもとくれは

人間は集団で暮らして文明を築いてきまし

た。視聴覚障害者との出会いにより、自分を振り返り、課題を見つけ改善策を提案し、さらに多くの人にメッセージを送った杉元来羽さんは、学んだ知識や豊かな心を役立てようとしているのを感じました。ひたちなか市には全国に十一しかない盲導犬を育成し視覚障害者に貸与する「いばらき盲導犬協会」があります。近い将来、公平な社会を築いていけるようみんなが助け合っていきましょう。

「いじめが世界からなくなるには」

勝田第二中学校 木村斗耶さんきむらとや

多くの人が「いじめは許されない行為だ」と分かっているはずなのに、いじめはなくなりません。最近では、大人の誹謗中傷や嫌がらせ行為もクローズアップされています。自分だけが楽しい思いをしようとする社会は、誰もが住みにくい社会になると考えます。木村斗耶さんは、いじめられている人の気持ちをも十分理解し、見て見ぬふりをせず寄り添っていく事の大切さを主張していました。いじめが世界からなくなるために、一人一人が「いじめは、絶対にしてはいけない」という正しい正義感と強い意志を持って社会を変えていってほしいと思います。

「見方を変えてみたら…」

勝田第二中学校 助川陽菜さんすけがわはるな

同じことを考え、行動している仲間には確かに楽に付き合う事が出来ます。しかし、助川陽菜さんが主張する「多様性を大切にする」という事は、異なる性質を尊重して受容する環境を築くことで、コミュニケーションが円滑になり新たな価値を創造し幅広いより楽しさが広がる関係です。現在「ダイバーシティ」と言って特に企業や社会の組織で重要視されてきていることです。そのためにも、私たち一人一人が、相手が自分と違っていても理解しようとする「広い心」と「知識」や「知恵」が必要であると思います。学校の学習や生活の中でも、様々な考え方を探り、理解していくような学習も必要になってきます。

「差別のない世界を」

勝田第三中学校 竹中愛莉さんたけななかあいり

世界のニュースから疑問を感じ、世界共通の課題だと捉え、様々な思いに発展していった。違った相手を理解するには、知識と教養が必要でし、弱いものをいじめない心を持つには、豊かな心と自分をコントロールできる強い心が必要と言う人もいます。しかし

何より、竹中愛莉さんの主張するように一人一人が意識を持って、みんなが平等に暮らしていけるよう、できる事から行動することが、本当の幸福を目指した社会づくりであると私も考えます。

「街のゴミを『ゼロ』に」

勝田第三中学校 西村拓真さんにしむらたくま

自分たちが暮らしているところをきれいにして住みよくすることは、日々の学校の清掃と同じに大切なことです。きれいな所に住むことを誰もが望んでいるのですが、自分たちできれいにするとなると難しいことです。西村拓真さんは、身近にいる大人の良い行動から自らも実践し、その体験から様々な感情や考えを持って、住みやすい社会への提言をしています。中学生は社会へ関心を持ち、社会の一員として自立した生活を営む力を育む大事な時期です。一人一人の小さな行動が大きな力になり自分たちの住んでいる街をよりよい街にするといった主張を誰もが気が付き、実行していったほしいものです。

「幸せに生きるということ」

佐野中学校 住谷双葉さんすみやふたば

「幸せに生きる」という難しいテーマについて、身近な生活から追求し、しっかりと考えたのもとに自分の主張を述べていました。『幸福度ランキング』は六十二位でも『幸福を手にするチャンスがあるランキング』は間違いなく上位ではないでしょうか」という住谷双葉さんの考えに、思わずうなずきました。日々の何気ない生活に感謝することにも気付き、ピンチをチャンスにした生き方ができるのではないかと思います。

「誰もが深呼吸できる未来へ」

佐野中学校 酒井遙奈さんさかい はるな

酒井遙奈さんの主張から、差別することなく一人一人が唯一無二の存在であることを認め合い、「I can breathe!」と胸いっぱい空気を吸い込み深呼吸できる世界の実現に向かっていく力強い決意を感じました。世界のニュースから自分の事として物事を捉え、深く考えていった姿勢は、まさにグローバルの世界に生きているのだと感じました。自分たちが優位の立場に立った時、特にこのことを忘れないように心に刻む必要がある

ると思いました。

「コロナで再発見！給食がくれる幸せ」

大島中学校 太田玲美さん

好きなものがいくらでも食べられる現在、食べ物を作る人への感謝を込めながら「おいしい！」と言って食べている人は、食べ物を大切にしている心が豊かな人だと感じます。二〇一八年時点で九人に一人である約八億二一〇〇万人が飢えに苦しんでいます。そのような中、食品廃棄物の量は十三億トン、年間生産量の約三分の一は捨てられていると言われています。太田玲美さんが主張するように、「給食をおいしく食べて、毎日元気に過ごす」このような当たり前のことが本当の感謝の心であり、そのような人を一人増やすことから未来が変わると私も思います。

「これから生きるために」

大島中学校 堀江李羽さん

確かに募金活動や社会貢献活動などは日本ではまだまだ日常的に広まっています。特に小中学生などは、社会の一員としてもっと扱ってよいのではないかと思います。平成の初期のころ、大島中学校でも、ネパールの子

どもたちが学校に行けないと知り、生徒会が中心に文化祭の時に募金活動をして学校建設資金を寄付したことがあります。堀江李羽さんは、留学した時の体験を無駄にせず、世界の様々な文化や生活を知り自分の周りをより良くしていこうとしていることは非常に大切な経験だったと思います。「とにかく行動に移さなければ何事も先には進まない」と主張している通り、知っている人は多くいるけどそれを行動に移す人は非常に少ないと感じます。「恐れず行動する」それを支えるのが教師であり周りの大人であると考えます。

「大人へと成長するために」

田彦中学校 藤咲拓睦さん

この主張文を読んでもみると、橋本左内が十五歳の時に書いた「啓発録」の「五訓」を読んでいるようでした。その書は、子どもじみた幼い心を捨て本気で実行する橋本左内の決意を述べたものです。藤咲拓睦さんは、三つの意思を持って三つの力が付くように日々努力していく決意が感じられました。中学時代、よく「何になりたいか」という事を聞われますが、このように「どのような大人になりたいか」と自分自身に問い、アイデンティ

ティーを形成させていく事こそが、本当に大切な努力ではないかと考えます。それがあれば、どんな困難も乗り越えられる力が備わると思いますし、質の高い社会ができると考えます。

「楽器がくれた笑顔」

田彦中学校 佐藤ゆりこさん

楽器を演奏するすばらしさ、楽器を愛している気持ち伝わってきました。確かに音楽や絵などいわゆる芸術文化は、人の心を豊かにし、心の支えにもなってくれます。特に楽器は歌詞がない分、自分の思いに正直になり自分の心に入ってきます。佐藤ゆりこさんが演奏する楽器によって、身近な人が楽しさを味わえるようになったらうれしいですね。騒音のトラブルもありますが、お互いに配慮し工夫していけば解決できるのではないかと思います。楽器が演奏できるといふ事は一生の糧となると思います。

「ベストをつくす楽しさ」

那珂湊中学校 久保田真尋さん

久保田真尋さんの主張から、ベストを尽くしている人からかう風潮は、馬鹿にする気

持ちや消極的に取り組む態度から起こるとし、ベストを尽くす楽しさや喜びを感じる大切さが伝わってきました。アリとキリギリスの童話がありますが、はじめにやる正義と努力は難しく辛いものでもあるので、とかく敬遠されがちです。しかし、常にベストを尽くしている人は、着実に力がついていて取り組む前と後では大きな差が自分の中に生まれていると私は考えます。アスリートは、常に練習において全力で取り組み、本番では「リラックス」して臨むと言われています。本番でリラックスするためには、自分が納得するまでできないかもしれないという不安が解消するまで練習すると聞いています。あなたの未来はあなたのものです。「恥ずかしいからしない」ではなく「恥ずかしくないようにベストを尽くす」そのような人が増えていってほしいと思います。

「コロナウイルスとの共存」

那珂湊中学校 眞家湊彩さん

今年は、新型コロナウイルス感染症対策の日々で学校だけでなく社会全体が未曾有の事態に混乱しています。しかし、ピンチはチャンス。様々な気付きがあり、改善や工夫があ

ちらこちらで見られるのは、自然界の猛威に立ち向かうたくましい人間の力を感じます。眞家湊彩さんも逆境の中、九月入学という新しい学校のシステムを提案し、改善を目指していました。海外は九月入学が多く、確かにグローバル化を目指すなら九月入学制度も一つの検討課題だと考えます。多くの人の様々な意見を受けて、九月入学制度はこれからも検討していくそうです。

「命の大きさ」

平磯中学校 川崎寿樹也さん

飼っている動物は、家族の一員として大切な存在なんだという川崎寿樹也さんの強いメッセージが伝わってきました。ペットとして可愛がるおもちやのような存在でなく、しつけや世話をしながら共に育てていく大切さを伝えていました。さらに命を預かる責任を持つて動物を飼うという姿勢の大切さを教えてくださいます。そういう人たちは、飼っている動物の気持ちも理解しようとして動物と人間との区別なくお互いに大切にしよう存在になるのでしょうかね。

「セルフ・ハンディキャッピングからの脱出」

平磯中学校 飛田汐音さん

「セルフ・ハンディキャッピング」と言う難しい自分自身への課題を取り上げ、飛田汐音さんの未来に向かってたくましく生きていこうとする姿勢が伝わり、読んでいても励みになりました。「前向きな勇気」を持って日々対応していこうと考えました。オリンピック選手や挑戦者たちが「金メダル取ります」とか「優勝をねらいます」とか言っているのを見て「簡単に言っているな」と思っていました。が、「あえて前もって強気な発言、勇気ある発言をすることにより、その後の行動自体も引つ張られていく」ことを常に意識していたのだと理解しました。多くの人が「セルフ・ハンディキャッピング」から脱して、失敗を恐れず前向きに突き進んでいってほしいと思いました。

「コロナに包まれた世の中」

阿字ヶ浦中学校 大久保歩夢さん

今回の新型コロナウイルス感染症拡大のための様々な措置は、今まで経験したことのないことばかりで恐怖と不安そして不自由さを感じたことと思います。大久保歩夢さんはそ

のような中、長い自粛生活をして日本社会や世界の事を知り、様々なことを考えたようです。中学生時代に、自分の事だけでなく社会の事を興味をもって知っていくという事は、

社会の一員として成長するためにとっても大切なことです。そして「人と関わる」ことができるという幸せを再発見し、自分たちにできる事を考えていこうとメッセージを送ってくださっています。娯楽や浪費の生活に進んでいつている人たちにとっては、もう一度立ち止まって考えてほしいと「思いやり」と言う言葉で伝えていました。このような状況の時「私たちは何をすべきか」一人一人が答えを見つけてあげることが大切であると考えます。

「大切なこと」

阿字ヶ浦中学校 柴琴理しばことのさん

三か月の休校の中、どこにも出かけることなく自宅で課題をやる毎日の中、柴琴理さんは、自分と見つけ合い素晴らしい三つの事「受験生としての自覚」「SNSの危険性」「友達の大切さ」に気が付き考えました。その考えは、「将来への目標」「社会の問題」「周りへの感謝」と言った前向きで実効性のあるものでし

た。逆境の中でも、ささやかな幸せを見つければ前へ進んでいける事こそ「幸せをつかめる」大切なことと考えます。願いと志でまとめた、読んでいる人も元気が出る主張でした。

以上、十八名の皆さんそれぞれが、素晴らしい主張を発表してくれました。

最後に、ご指導に当たられた先生方、そして運営にご尽力いただいた関係各位の皆様、そして保護者の皆様のご協力に感謝申し上げます、私の講評といたします。
ありがとうございました。

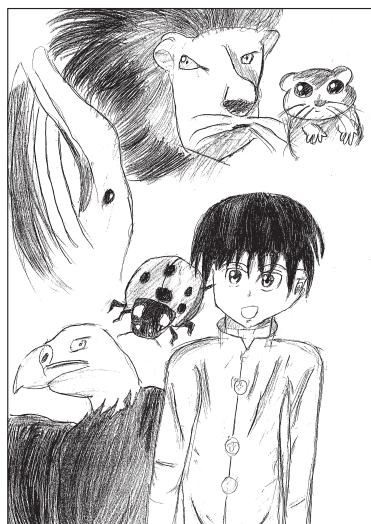
令和2年度ひたちなか市少年の主張大会を担当した「一中地区地域のふれあいを広める会」の地域内にある勝田第一中学校の美術部のみなさんが「少年の主張大会」をテーマにイラストを描いてくれました。



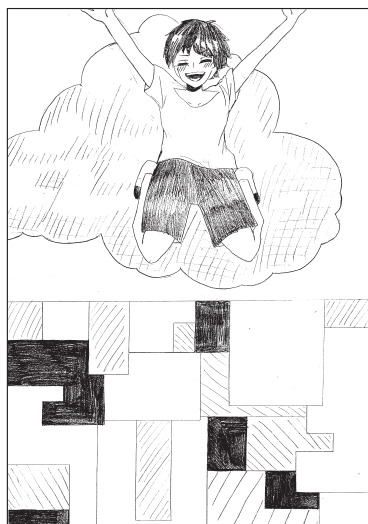
1年 今村 みずき



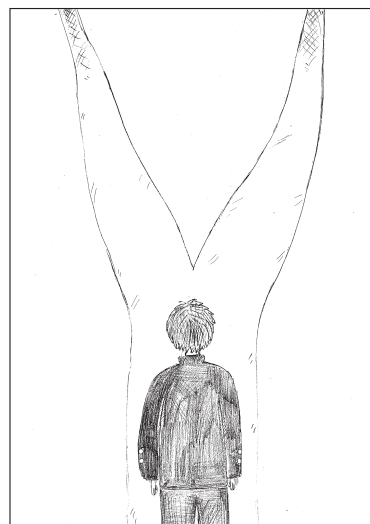
2年 小林 龍生



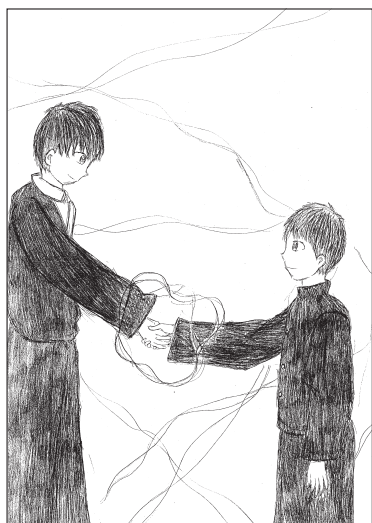
3年 大内 智陽



1年 白井 寧々



1年 安 帆乃珈



1年 栗辻 巴恵



1年 八木 美洸

令和2年度ひたちなか市少年の主張大会

主 催 ひたちなか市コミュニティ組織連絡協議会

主 管 一中地区地域のふれあいを広める会・同青少年部会

イラスト協力 ひたちなか市立勝田第一中学校